

「戦後民俗学の認識論批判」と 比較研究法の可能性

盆行事の地域差とその意味の解読への試み

The Epistemological Critique of Postwar Folkloristics and Potential of
the Comparative Research Methods : Experiments in Deciphering Regional
Differences in Bon Festival Events and the Significance Thereof

関沢まゆみ

SEKIZAWA Mayumi

- ①戦後民俗学の認識論批判
- ②両墓制の分布とその意味
- ③比較研究法批判の中の誤解
- ④盆に迎えまつられる靈魂をめぐる研究史
- ⑤盆棚設営と墓参習俗と靈魂感覚をめぐる地域差
- ⑥盆行事の地域差とその意味

おわりに

【論文要旨】

本稿は、近年の戦後民俗学の認識論批判を受けて、柳田國男が構想していた民俗学の基本であった民俗の変遷論への再注目から、柳田の提唱した比較研究法の活用の実践例を提出するものである。第一に、戦後の民俗学が民俗の変遷論を無視した点で柳田が構想した民俗学とは別の硬直化したものとなったという岩本通弥の指摘の要点を再確認するとともに、第二に、岩本と福田アジオとの論争点の一つでもあった両墓制の分布をめぐる問題を明確化した。第三に、岩本が柳田の民俗の変遷論への論及にとどまり、肝心の比較研究法の実践例を示すまでには至っていなかったのに対して、本稿ではその柳田の比較研究法の実践例を、盆行事を例として具体的に提示し柳田の視点と方法の有効性について論じた。その要点は以下のとおりである。(1) 日本列島の広がりの上からみると、先祖・新仏・餓鬼仏の三種類の靈魂の性格とそれらをまつる場所とを屋内外に明確に区別してまつるタイプ(第3類型)が列島中央部の近畿地方に顕著にみられる、それらを区別しないで屋外の棚などでまつるタイプ(第2類型)が中国、四国、それに東海、関東などの中間地帯に多い、また、区別せずにしかも墓地に行ってそこに棚を設けたり飲食するなどして死者や先祖の靈魂との交流を行なうことを特徴とするタイプ(第1類型)が東北、九州などの外縁部にみられる、という傾向性を指摘できる。(2) 第1類型の習俗は、現代の民俗の分布の上からも古代の文献記録の情報からも、古代の8世紀から9世紀の日本では各地に広くみられたことが推定できる。(3) 第3類型の習俗は、その後の京都を中心とする摂関貴族の觸穢思想の影響など靈魂觀念の変遷と展開の結果生まれてきた新たな習俗と考えられる。(4) 第3類型と第2類型の分布上の事実から、第3類型の習俗に先行して生じていたのが第2類型の習俗であったと推定できる。(5) このように民俗情報を歴史情報として読み解くための方法論の研磨によって、文献だけでは明らかにできない微細な生活文化の立体的な変遷史を明らかにしていける可能性がある。

【キーワード】 柳田國男、戦後民俗学の認識論批判、民俗の変遷論、比較研究法、盆棚、三種類の靈魂